

## 第118回 定期演奏会

## PROGRAM

## チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35 (約35分) ★

Pyotr Il'yich Tchaikovsky: Violin Concerto in D major, op.35

第1楽章 アレグロ・モデラート *Allegro moderato*第2楽章 カンツォネッタ:アンダンテ *Canzonetta : Andante*第3楽章 フィナーレ:アレグロ・ヴィヴァチッシモ *Finale : Allegro vivacissimo*— 休憩 (20分) — *Intermission*

## プロコフィエフ:交響曲 第5番 変ロ長調 op.100 (約45分)

Sergei Prokofiev: Symphony No. 5 in B flat major, op.100

第1楽章 アンダンテ *Andante*第2楽章 アレグロ・マルカート *Allegro marcato*第3楽章 アダージョ *Adagio*第4楽章 アレグロ・ジョコーソ *Allegro giocoso*指揮:アレクサンドル・ヴェデルニコフ *Alexsander Vedernikov, Conductor*ヴァイオリン:クララ=ジュミ・カン *Clara-Jumi Kang, Violin* (★演奏曲)管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*2019 10/18(金)・19(土)・20(日) 3:00PM開演  
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:

文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人 日本芸術文化振興会

これさえ  
見れば  
わかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論)

定期演奏会

## 19世紀と20世紀のロシアの名作2曲

今月定期は、19世紀ロシアに生きた大作曲家チャイコフスキーと、20世紀ソビエト連邦時代に活躍した大作曲家プロコフィエフの登場。

チャイコフスキーの「ヴァイオリン協奏曲」は、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスのそれと併せて「4大ヴァイオリン協奏曲」と謂われることもある。ロマンティックで哀愁に満ちた音楽が人気の的だ。

一方、プロコフィエフの「交響曲第5番」は、彼が革命後のソ連邦に戻り、以前の急進的な作風を捨てて、大衆のために「解りやすい」スタイルを採りはじめていた時代の作品である。「作品100」という記念的な数字であることも、彼がこの交響曲に並々ならぬ力を入れて作曲した所以であった。リズムカルな曲想が多いのも特徴だが、随所で何気なく大きく転調してしまうという、いかにもプロコフィエフらしい洒落っ気充分の面白さも、じっくりと演奏に身を入れて聴いていれば味わえるだろう。

## 必聴P◎INT

ライター  
おすすめ!!

チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35

## 《憂愁のチャイコフスキー》

第1楽章と第2楽章には、チャイコフスキーならではの憂いに満ちた美しい曲想が満ちあふれる。特に第2楽章の主題には、やや感傷的な趣さえ感じられるだろう。それらはこの作曲家の多彩な特徴のほんの一部に過ぎないもののだが、魅力的であることは確かである。

プロコフィエフ:交響曲 第5番 変ロ長調 op.100

## 《明快で平易な大交響曲》

プロコフィエフの全交響曲中、最もスケールが大きく、しかも「解りやすい」曲だ。リズムカルで、ダイナミックで、旋律的にも親しみやすい。豪壮な第1楽章、軽快な第2楽章、静寂な叙情の中に力が胎動する第3楽章、ひたすら突進を重ねる第4楽章。長大だが面白い。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論)



## チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.35

初演: 1881年12月4日 ウィーン

### チャイコフスキー唯一のヴァイオリン協奏曲

不幸な結婚生活から逃れて精神的に解放され、さらに友人フォン・メック夫人から多額の年金を保証されて財政的にも安定したチャイコフスキーは、1878年初頭に第4交響曲を完成、次いでオペラ「エフゲニー・オネーギン」を完成するなど、活発な創作活動に入っていた。

そして同年3月15日、スイスのクラランで、友人のヴァイオリニストのコチェークとともにラロの「スペイン交響曲」(ヴァイオリンとオーケストラのための作品)をみずからピアノで演奏、大いに気に入り、自分もヴァイオリン協奏曲を書いてみよう、と思い始める。そしてなんと17日には本当にこの協奏曲の作曲を開始、4月10日には完成してしまったのである。驚くべき速さである。

そして出来上がった作品を、ペテルブルク音楽院教授のヴァイオリンの名手、レオポルド・アウアーに見せ、初演してもらおうと目論んだのだが、意外にもこの名手から「演奏不可能」という烙印を押され、落胆する。

長期間おクラになっていたこの協奏曲に注目したのは、ライブツィヒ音楽院教授でもあったロシアの名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブローツキーである。彼はこれを1881年12月4日、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルとともに初演したが、散々な酷評を受けた。だがこれは、初演の場所が悪かったとしかいいようがない。当時のウィーンの楽壇の嗜好からすれば、

ロシアの作曲家チャイコフスキーの作風は、全く合わないタイプのものだったのである。語学の堪能なチャイコフスキーは、それらの新聞批評を読み、「批評に恵まれていない」と嘆いたという。

だがブローツキーはその後もこの曲を各都市で演奏しつづけ、1882年5月にはロンドンで初演して大成功を収めるなど、次第にこの曲の真価を世に認めさせていったのだった。なお、アウアーがのちに自分の考えを全面的に改め、自らも演奏するようになり、また弟子のハイフェッツらにもこの曲を教えて演奏を薦めたことは、とりあえず称賛されるべき態度であつたろう。

曲は3楽章からなる。かなり長い第1楽章は、第1主題・第2主題ともに哀愁にあふれて美しいが、特にその人気のある有名な第1主題がオーケストラで演奏される時には、堂々たる風格をもつにいたる。第2楽章は、甘美な憂愁に満ち、まさに「チャイコフスキーぶし」全開の趣である。

それが遠ざかると、曲は切れ目なく第3楽章に入るが、ここはロシアの舞曲トレパークの形を取り入れた、快速テンポの躍動的な音楽だ。終結部はチャイコフスキー特有の押しの強さで、猛烈に追い上げ、盛り上げ、勢いに乗ったまま、主題のモチーフの最強奏で結ぶ。

#### 楽器編成

独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部



#### 作曲家プロフィール

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840-1893)  
*Pyotr Il'yich Tchaikovsky*

ロシア最大の作曲家で、人気も抜群。「くるみ割り人形」「白鳥の湖」など3つのバレエ音楽は世界バレエ史上不滅の傑作であり、バレエ音楽にドラマ性を確立した作品として音楽史に輝く存在だ。ほかにも「マンフレッド」を含む7つの交響曲をはじめ、管弦楽曲、室内楽曲にも親しまれる作品が多い。協奏曲では「ヴァイオリン協奏曲」と「ピアノ協奏曲第1番」が特に有名で、彼の名を付した世界屈指の「チャイコフスキー国際コンクール」における本選の課題曲にもなっている。

## プロコフィエフ:交響曲第5番 変ロ長調 op.100

初演:1945年1月13日 モスクワ

## 時代が生んだ大交響曲

1917年のロシア革命を避けて欧州に滞在した時代には、プロコフィエフの作風は、急進的な、モダニズム的な傾向を示していた。が、1934年に故国復帰を果たすあたりからその作風は一転し、ソビエト・リアリズムの理想に即した、平易平明なスタイルを示すようになった。いや、むしろそういう音楽を書きたくなったためにソビエト連邦に戻った、という見方もできるかもしれない。

1932年にモスクワの夕刊に寄稿した彼の一文の中には、「社会主義建設の英雄的側面は、自分の大きな音楽のキャンバスの中で、ぜひとも具体化したいセンチメントなのである」という表現も見られる。また1934年11月発行のソビエト機関誌「イズベスチャ」への寄稿では、「必要なのは、時代の壮大さに釣り合うような音楽なのだ。まずそれは旋律的であること、その旋律はシンプルで解りやすいものであること……」と、単純明快さが何より重要だとまで書いているのである。

しかし、1934年といえば、キーロフ暗殺事件を端緒として、あのスターリンの有名な大粛清が開始された年だったのだ。それからの数年間は粛清の嵐が荒れ狂い、多くの要人が犠牲となった。音楽関係でも、1936年にはショスタコーヴィチでさえもが「ブラウダ」紙から猛烈な批判を受け、危機的状態に陥ったほどだったのである。プロコフィエフがそれらの事件を知らなかったはずはないが、彼はそういう状況をどう見ていたのだろうか？

とにかく彼は、帰国後には、「ヴァイオリン協奏曲第2番」や「ピーターと狼」、バレエ曲「ロメオとジュリエット」、カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」、オペラ「戦争と平和」といった、西欧の現代音楽の潮流とは全く異なるスタイルによる、「平明な」傑作を次から次へと発表していったのだった。

彼の交響曲は、番号付のものは7曲を数えるが、この「第5番」は、そのソ連に戻ってから書いた最初の交響曲にあたる。それは、第二次世界大戦も終焉に近づきつつある1944年の7月から11月にかけて作曲され、1945年1月13日、モスクワ音楽院大ホールで開催されたプロコフィエフ作品演奏会で初演されたのだった。

この日は、まずニコライ・アノーソフ(名指揮者ロジェストヴェンスキーの父)の指揮で「古典交響曲」と「ピーターと狼」が演奏されたあと、折しもソ連軍がヴィスラ河での戦闘に大勝利したことを慶ぶ祝砲が轟き、指揮台に立ったプロコフィエフはその余韻の中で「第5交響曲」の演奏を開始した、と伝えられている。それは、彼の生涯において最も晴れがましい日であったかもしれない。「私の第5交響曲は、自由で幸福な人間への、その力強い才能と、純粋で気高い精神への賛歌として作られた」と彼は述べている(注)。

曲は4楽章からなる。第1楽章は夜明けを連想させるような、ゆったりとした主題で始まるが、全体としては非常に動きが激しく、強弱の変化も劇になる。第2楽章は軽快なスケルツォ(諧謔)で、プロコフィエフらしい皮肉めいた表情も随所に顔を覗かせる。一転して第3楽章は深味のあるアダージョ。沈潜というよりは、躍動感を底に秘めた緩徐楽章といっているかもしれない。

そして第4楽章は静かな序奏で始まるが、間もなくリズムカルな楽章本部に入り、エネルギーに明るく進む。終結近く、打楽器も総動員されて突進に次ぐ突進を重ねるが、全曲最後の8小節間で突然音量を弱めて現れる不思議な響きは、いかにもプロコフィエフらしい才気に満ちた手法である(さりとした指揮と演奏で行なわれた場合には、その意外性は感じられないことが多い)。

(注) プロコフィエフ著「自伝・評論」園部四郎他訳、音楽之友社刊

## 楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、E♭クラリネット、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネアドラム、タムタム、タンブリン、トライアングル、ウッドブロック、ピアノ、ハープ、弦楽5部



作曲家プロフィール セルゲイ・プロコフィエフ (1891-1953)  
Sergei Prokofiev

20世紀のロシアおよび革命後のソビエト連邦で活躍した大作曲家。ペテルブルク音楽院時代を含む若い時期には革新的な作風の持主だったが、のち社会主義リアリズムに理想を見出し、平明な作風に転換した。その作曲スタイルは、後世の批評家からは「保守的」と呼ばれるが、今日世界に広く親しまれている彼の作品は、ほとんどがその後年のソ連時代に書かれたものである。他界は1953年3月5日、奇しくも圧制者スターリンと同日であった。